

ずいそう



年賀状余話

田中雄作

毎年11月初めに「お年玉付き年賀ハガキ」の売り出しがある。このころになると私は「あー、また、年賀状の季節か……」といささか憂鬱になるのである。その訳をこれからお話ししようと思う。

我々の年代のどなたにも覚えがあると思うが、小学生の頃、絵画（図工？）の時間に版画で年賀状を作る勉強（？）があった。最初はイモ版で、次にゴム版になり、さらには木版に進み、場合によっては銅板やシルクスクリーンを経験された方も多いと思う。私の場合は木版が性に合っていたようで、中学生の頃から毎年きまって版画の年賀状を制作するようになった。それ以来、父親が亡くなった年以外は欠かさず続けており、もう40年を越える。始めは50枚程度だったが、だんだん人生を重ねるにつれておつき合いが広がり、今では既製ハガキも併用しているが、それでも500枚位は版画の年賀状をさしあげている。かなりの労力を要するので、何度か「もうやめようか……」と思ったこともあったが、「来年はどんな年賀状がいただけるか楽しみです。」などとご丁寧なお便りをいただいたりしてなかなかやめられなくなり、現在に至っている。

年賀状のような小品でも版画としては一連の工程が必要で、

①図案を考える、②原画を描く、③版下を作る、④版木に転写する、⑤彫る、⑥刷る、といった作業を積み重ねなければならない。中でも一番時間をかける（かかる）のは①で、なかなか「これだ！」と納得のいくものが思い浮かばない。冒頭に「憂鬱になる……」と申し上げたのはこのためで、つくづく己の才能の無さにいやになることがある。

図柄の基本コンセプトは大体決めていて、「干支」か「この一年間に携わった仕事」、或いはその両者を絡み合わせたもので、どこかにちよっぴりユーモアを交えたもの……ということにしている。私は建設会社のいわゆる「ダム屋」なので、建設に従事したダムをモチーフにした年も多い。その場合も、山の端から「兎」がのぞいていたり、天空から「龍」が見下ろしてい

たり……といろいろ工夫を凝らしている。苦し紛れにダムサイトの景色を描いて、川を「蛇行」させてお茶を濁した年もあった。娘が結構画才があった（親馬鹿？）ので、小学生の頃は「虎が酒を飲んでトラになったところを描け」とか「ネズミがゴルフをしているところを描いてごらん」などおだてたりスカシたりして絵を描かせ、それを盗作したりしたが、それも数年で、彼女が美術高校から大学へ進み、絵をメシのタネにするようになってからは親父の下請けなどにはあまり興味を示してくれなくなり、元の木阿弥となった。

時には、ずいぶん早い時期にヒラメクことがあって、シーズンが来るのが待ち遠しい年もあったが、そんなことはごく希で、たいていはギリギリまで案がまとまらず、四苦八苦しながら「エーイ、もうこれでいこう！」となって、徹夜で版を彫り12月の土曜、日曜をほとんどつぶして制作にかかることになるのが常であった。そして、年賀状の束を投函した後、「来年こそはもっと早く取りかかろう！」と心に決めて正月を迎えることになるのである。毎年いろいろ批評して下さる奇特（？）な方もおられて、「今年はちょっと手を抜いたネ。」などと、人の苦勞も知らないでコメントを下さる。そんなときはこちらも少々引け目があるので、ニコニコしながら心の中で「来年こそは目にも物を見せてくれる！」と意気込むのだが、一年経つとまた同じことの繰り返しとなるのである。

それでも版画の制作は楽しい。納得のいく原画ができたときはなおさらである。基本的には手順良く計画的に仕事を進めたときの方がよい結果になることが多いが、時には原画から版下をおこし、彫り、刷りと工程を重ねるにつれて当初予期しなかった思いがけない効果が現れたりして嬉しくなることもある。

こうして出来上がった年賀状は、毎年一枚だけスケッチブックに張って残してきた。12年前、24年前、36年前……と同じ干支のものを振り返って眺めてみると、そのときの苦勞が思い出される。同時に、その時々の仕事のこと、家庭のことなども思い出が蘇ってきて、しばし瞑想に耽ることになる。

今年は老母が100歳の天寿を全うして他界したため、残念ながら（？）2度目のお休みとなる。最近では彫刻刀を操るにも特殊拡大鏡が必要になってきたので、今後どれくらい続けられるかわからないが、体力、気力の続く限り挑戦しようと思っている。